

実践報告

筑波大学グローバルエイジングセンターの活動

—地球規模の高齢社会に向けた国際的・学際的取り組み—

宮下裕美子¹⁾，田宮菜奈子¹⁾，本澤巳代子²⁾，間辺利江¹⁾，柏木志保^{1,2)}
モゲス・アブ・ギルマ²⁾，大久保一郎¹⁾，田中洋子²⁾，松田ひとみ¹⁾

現在、高齢化はもはや先進国のみでなく途上国でも急速に進展し、グローバルな課題となっている。増加する高齢者の身体的、精神的、社会的に健康な生活をどのように支えるか、社会全体としての迅速な対応が求められている。特に、経済、社会基盤が未だ十分に整っていないうちに高齢化を迎えた（る）途上国において、高齢化への備えが急務となっている。かかる状況下、超高齢社会のフロントランナー日本の経験、知見に対する国際的関心が非常に高まっている。一方、高齢化対策の検討には、介護、医療、社会保障から、家族のあり方や、宗教、死生観まで多岐にわたる社会、文化的背景の尊重が必須であり、分野横断的、学際的な取り組みが求められる。

そこで、筆者らは日本の高齢者対策の経験を世界へ発信する国際的かつ学際的な研究・教育拠点「筑波大学グローバルエイジングセンター」の設立準備を進めている。エイジングに関する研究を扱う様々な分野同士が本センターを通して意見交換を行い、協力し合い、共同研究活動ができる拠点を目指している。そのキックオフとして開催した国際会議「The 1st International Conference on Global Aging Tsukuba」ほか、初年度の活動をここに報告する。

キーワード： 高齢化，グローバルエイジング，国際保健

¹⁾ 筑波大学医学医療系

²⁾ 筑波大学人文社会系

I. はじめに

世界的に進む高齢化に、近年国際機関は警鐘を鳴らしている。2012年のWHO世界保健デーのテーマは「高齢化と健康」であり、リプロダクティブ・ヘルスを中心的課題に据えるUNFPAも同年に高齢化について報告書をまとめた。これによると、現在、60歳以上の高齢者が人口の30%以上を超える国は日本だけだが、2050年には64カ国に増えるという予想されている。高齢化の進行は途上国においてより急速で、2050年には、世界20億人の高齢者のうち8割が途上国の高齢者となる(図1)^{1,2)}。

高齢化、つまり、より多くの人々が長寿を享受できるようになったというそれ自体は大変喜ばしいことである。しかし、同時に進む少子化により家族や社会の支え手が減少する中で、増加する高齢者の身体的、精神的、社会的に健康な生活をどのように支えるかは重要な課題であり、社会全体としての迅速な対応が求められている。特に、経済、社会基盤が未だ十分に整っていないうちに高齢化を迎えた(る)途上国において、この問題は深刻である。

こうした状況下、超高齢化のフロントランナーである日本の経験、知見に対する国際的関心が非常に高まっている。実際、この機運に対し、日本国政府(外務省)も、長寿健康社会を日本ブランドにして、国際保健を日本外交の重要な課題としてオールジャパンで推進しようという、国際保健外交戦略を平成25年に策定している³⁾。

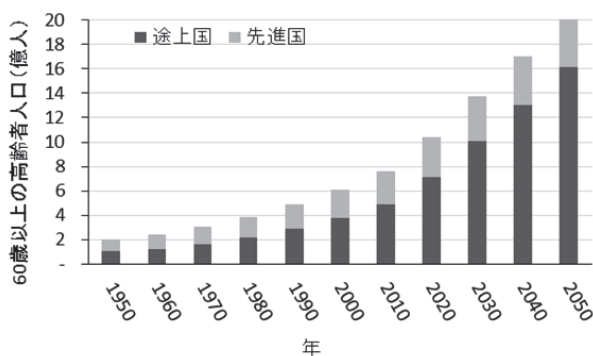


図1. 途上国、先進国別高齢者人口の推移²⁾

ここで、高齢化対策を検討する上では、高齢者一人ひとりの健康や幸福を追及するミクロな視点と、それを支える社会政策の在り方というマクロな視点、双方が欠かせない。言い換えれば、個人の生き方、死生観や家族観から介護、医療、社会保障まで、多岐にわたる社会的、文化的、政治的背景の尊重が重要であり、従来の医療、経済などの分野別のアプローチを超えて、学際的に取り組まなければならない。グローバルな取り組みにおいては、各国の社会的、文化的、政治的背景の尊重はますます重要であり、学際的かつ包括的な新しいアプローチが一層求められているといえよう。

II. 筑波大学グローバルエイジングセンター

このグローバルなニーズに応えるべく、筆者らは、日本の高齢者政策の実証研究の学術的発展をはかり、高齢化に全方位的に対応できる、国際的かつ学際的な研究・教育拠点「筑波大学グローバルエイジングセンター (Center for Global Aging Tsukuba、略称CGAT)」の設立準備を進めている。世界最高水準と呼ぶに相応しい実績と学際融合性などを有し、新たな学術研究分野を切り拓く教育研究組織へと発展させるべき研究拠点の卵として、平成25年度筑波大学プレ戦略イニシアティブ(研究拠点提案型)に採択されたものである。

1. 目的

1) 高齢者に特化した、国境と学問領域を超える多様な研究者同士の架け橋の形成：CGATを通して本学を中心としたエイジングに関連する様々な分野同士が出会い、意見交換を行い、協力し合える機関として位置づける。助成金獲得支援も行い、共同研究活動、共同教育活動を促進する。

2) 我が国の経験の実証評価による根拠に基づき、かつ各国を尊重した学術研究および政策提言の推進：我が国の経験に学びたいという海外からのニーズが高まる一方、介護保険評価など実証研究自体がまだ少ないのが我が国の現状である。グローバルなニーズに対

応するためには、学際的かつ包括的な新しいアプローチで、我が国の介護保険制度の分析を一層進める必要がある。また、欧米の介護先進国、高齢化が進展している途上国の高齢化にかかわる現状と課題についても情報収集を行い、日本や各国間の比較研究を通し、相互に学び合うことが重要である。

3) 研究と教育を有機的に結びつけ、若い発想を尊重した新たな学際的高齢者研究の推進と成果の発信： 筑波大学は文部科学省事業「国際化拠点整備事業」である「グローバル30 (G30)」に採択されており、2013年12月現在、109もの国と地域から2千人を超す留学生が在籍している（筑波大学留学生交流課調べ）。この国際色豊かな人的リソースを活用し、各国の高齢化および高齢者、家族等の現状について情報収集を行うとともに、既存の研究者だけではなし得ない、柔軟な発想に基づく議論を、各国学生と共有することが可能である。新たな学際的学位プログラムの構築も将来的な構想として念頭においている。

2. 拠点体制

これらの目的を達成するための体制として、日本初の人へのケアを包括的に研究する学際専攻であるヒューマンケア科学専攻、政策・社会分野で国際的教育実績のある人文社会系を中心に、エイジング問題に関心が高く、実績のある学内の教授陣14名を現在までに組織した。その専門は、法政策、社会医学、臨床医学、福祉、看護学、体育、心理、経済、障害学、社会保障にわたり、日本でここまで学際的なエイジングの組織はないと自負している。それぞれのリソースを活かしつつ、互いに協力して研究、教育活動に取り組んでいく（図2）。

さらに後述の国際会議には、システム情報系、図書館情報メディア系など学内の多岐にわたる分野から多くの外国人教員や若手研究者が参加したほか、産業技術総合研究所、国立社会保障・人口問題研究所、ユタ大学エイジングセンター（アメリカ）、日本老年学会等からの協力、助言を得ている。活動1年足らずで、様々なネットワークが立ち上がり、当初の想定以上にこうした繋がりが求められていたことを実感して

いる。

最終的な拠点体制としては、副次的組織として、政策立案のための基礎データ、根拠を学術論文成果として出すことに特化したヘルスサービスリサーチ部門と、その結果を踏まえた実際の政策提言を担う社会政策部門をおき、共同研究の実施および成果の学際的・国際的共有を全体のエイジングセンターとし、海外の他大学のエイジングセンター、行政、民間企業、関連団体や学会など、官民産と連携・協力しながら運営する計画である。（図3）。

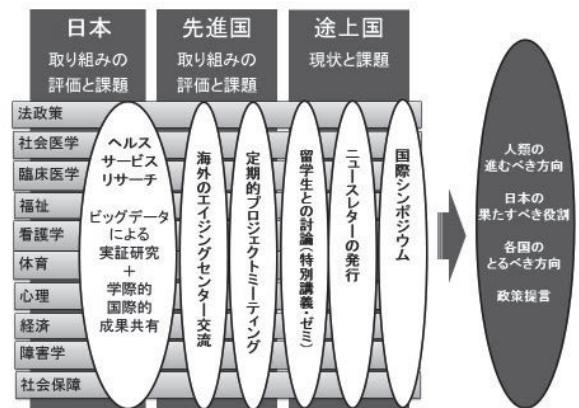


図2 拠点形成計画

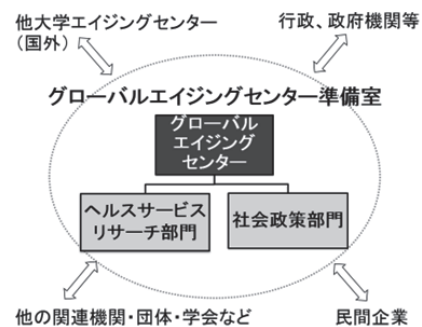


図3 拠点体制

III. 活動

初年度は、まず、本学を中心としたエイジングに関する研究者同士の架け橋となり、国と学問領域を超えた交流による研究活動の活性化を図ることに主眼を置いた。主に学内の連携強化のために、セミナーおよび国際会議を開催し、また学際的講義を開講したところ、予想を超える参加者が集まり、本研究テーマに取り組み、または関心を寄せる教員、学生の幅広さ、多さ

が確認された。主な活動の詳細は以下の通り。

1. The 1st International Conference on Global Aging Tsukuba (2014 年 1 月 24 日)

学内で様々な所属に分かれているエイジング関連の教員の発掘とネットワーク化を第一の目的として、学内より一般演題を募り、口頭発表 19 題、ポスター発表 10 題の計 29 演題の発表を得た。その領域は、医学医療系（高齢者の多剤服用による有害事象、嚥下障害のスクリーニング方法）、人間総合科学研究科（高齢女性のドメスティックバイオレンス、ADL の関連要因）、人文社会系（高齢者の文化的哲学的概念、ドイツにおける高齢者と労働生活）、人間系（認知症高齢者に対する Cognitive Stimulation Therapy）、システム情報系（高齢者におけるセルフネグレクト）、図書館情報メディア系（高齢者向け地域図書館サービス）等、臨床医学から社会的話題、哲学にまでバラエティに富んだ。日本の研究のほか、海外をフィールドにした研究も欧州（ドイツ）、米州（メキシコ、チリ）、アジア（タイ）、アフリカと多地域に及んだ。この中で、口頭・ポスター発表それぞれに、若手研究者を対象とした優秀発表者を表彰し、若手研究者のモチベーションの向上を図った。

また、ロンドン大学キングス・カレッジ老年学研究所より Dr. 林真由美を招聘し、海外が興味を示している点、教訓となる点は何か、という観点から日本の介護保険制度について講演「Long-term care for older people: The Japanese example」を得た。さらに、産業技術総合研究所、オムロン、NTT データの 3 社による出展ブースを設け、高齢化社会における産業界の先進的取り組みを共有したほか、ユタ大学エイジングセンター長ら海外の研究協力者からビデオメッセージが寄せられた。

学内 66 名、学外 14 名の計 80 名（うち外国籍は 10 か国以上から 22 名）の予想を超える多様な参加者を得て、分野、国を超えた横のつながり、分野内の縦のつながりを築く、貴重な交流の場となった。

一方、企画の過程では貴重な教訓を得た。ある分野ではポスター発表は一般的でなく、



論文を事前に配ったうえで最低 30 分の口頭発表を行うのが通常など、研究発表の方法について、分野毎のしきたりの違いを目の当たりにしたのである。学際的組織として、分野間の違いをどのようにすり合わせて共通化を図るかは今後の重要な課題である。

2. グローバルエイジングセミナー

国内外のエイジングに関わる研究者、実務家を外部講師に迎え、勉強会を行った。12 月からはグローバルエイジングセミナーと銘打ち、CGAT の一層のアピールに努めた。

- 「格差社会イギリスのプライマリーケア」 ロンドン大学キングス・カレッジ医学部 地域医療教育部門 特別研究員 武田裕子 (2013 年 9 月 5 日)
- 第 1 回：「変化を捉えるための指標の作成」 老人保健施設竜間之郷施設長 大河内二郎 (2013 年 12 月 12 日)
- 第 2 回：「老健施設の現場から見た課題と分析」 医療法人・社会福祉法人健清会理事長、公益社団法人全国老人保健施設協会副会長 高椋清 (2014 年 1 月 9 日)
- 第 3 回：「人類学者からみたグローバルエイジング」 長崎大学大学院国際健康開発研究科 准教授 増田研 (2014 年 1 月 21 日)
- 第 4 回：「米国公衆衛生大学院への留学～ハーバード大学 MPH、DrPH、エール大学でのポストドクの経験から～」 エール大学 Institute for Network Science 博士研究員 西晃弘 (2014 年 2 月 12 日)
- 第 5 回：「高齢者の医療・介護サービス

利用：「死亡前の累積入院日数と療養場所の移行について」東京都健康長寿医療センター研究所研究部長 石崎達郎（2014年2月13日）

- 第6回：「Advance Care Planning: Progress and Challenges」亀田メディカルセンター Professor in residence Sandra Y. Moody（2014年2月20日）

3. 専攻横断型関連教育プログラム

1) G30 特別講義（2013年9月26日、27日、10月3日）

G30の採択校であるという強みと本学ならではのフレキシブルな組織構造を生かし、様々な専門分野の留学生による各国高齢化対策についての発表と議論を中心とした学際的特別講義をH24年度に引き続き開講した。全学の学群、大学院の留学生6名（アフリカ2名、アジア2名、ラテンアメリカ1名、欧州1名）が履修し、Tsukuba Global Science Week 2013にて成果発表会を行った。若い柔軟な発想を尊重した新たな学際的高齢者研究の推進と成果の発信を可能とする貴重な試みであり、今後も継続していく。

2) 総合科目「法学入門～高齢社会と法～」 （2013年度秋学期開講）

日本の高齢者の社会生活に関わる法的諸問題を概観する講座を、総合科目として全学対象に開講した。高齢者の社会生活に関わる法的諸問題の重要性の評価とともに、高齢社会における諸問題の多角的視点からの評価ができるようになることを目標とし、自治体、介護保険施設等からも講師を招いた。130名以上の学生が履修し、中でも「法学」にもかかわらず理系の学生が多数受講し、幅広い学生の関心の高さと本テーマの学際性が改めて確認された。

IV. 今後の展開

今後は、さらに学内外での連携を深めるとともに、具体的な共同研究活動、共同教育活動につながるステップを検討したい。

具体的には、国際会議の発表を踏まえた、発表者同士、多彩な学問分野間のコラボレ

ション研究を推進する。その為の学際的研究者ネットワークの形成、コラボレーション研究プロジェクト会議などを運営し、研究の遂行がスムーズに行く環境作りをする。さらに、国際会議の参加企業等を中心に、産学連携の下での研究実施の準備を行う。また、国際連携としては、CGAT代表の田宮がSpecial Editorを務めるGlobal Aging (BioMed Research International Hindawi Publishing) の編集チームを核に、すでに交流のあるハーバード大学、ユタ大学、マイアミ大学（米国）、ブレーメン大学（ドイツ）、ウプサラ大学（スウェーデン）、シンガポール大学、チュラロンコン大学（タイ）との連携の強化と拡大を図り、共同研究の論文化、学生（院生）交換などをさらに推進する計画である。

また、第2回国際会議を、筑波キャンパスと東京大塚キャンパスとの二か所で行い、国際レベルでの参加者を募る。筑波キャンパスで実施の会議は、学内研究者・学生を主な発表者とし、東京キャンパス実施日には、学内外を問わず、広くエイジングに関わる研究の発表と招待講演を盛り込む。

さらに、1～2か月に1度、学内教員の持ち回りによる研究発表のほか、国内外のエイジングにかかわる研究者や実務家をゲストスピーカーに招き、グローバルエイジングセミナー等の勉強会を実施する。

専攻横断型の関連教育プログラムも継続して実施する。学内のグローバルエイジング関係の諸活動とも連携し、エイジングに特化した学際的学位プログラムや、国際的な介護人材育成プロジェクトにも本拠点の人材や蓄積した知を相互共有して進める予定である。

また、研究者同士の情報交換及び研究成果の一般化を目的として、季刊の英文ニュースレターの発行を継続し、2013年度に立ち上げたWebサイトを研究情報の拠点としても充実させる。

V. 結語

CGATの使命は、地球規模の課題となった高齢化に全方位的に対応できる国際的かつ学際的研究・教育拠点として、超高齢社会のフ

ロントランナー日本の経験、知見を世界に発信し、共有することである。

具体的には、エイジング関係の研究者らを有機的に結びつけ、学際的視点から研究を推進すること、そして、その成果を一般化または政策提言につなげることを目指している。その肝は、研究者一人一人である。CGATの今後の活動、共同研究に関心やアイディアのある研究者の方々、ぜひ協力を募りたい。

VI. 参考文献

- 1) UNFPA and Help Age International: Ageing in the Twenty-First Century: A Celebration and A Challenge, 21-23, 2012
- 2) UN Department of Economics and Social Affairs. Population Division. World Population Prospects, the 2010 Revision. 2011. Annual Population 2011-2100-Both Sexes. http://esa.un.org/wpp/Excel-Data/DB04_Population_ByAgeSex_Annual/WPP2010_DB4_F1B_POPULATION_BY_AGE_BOTH_SEXES_ANNUAL_2011-2100.XLS.
- 3) 外務省 . 国際保健外交戦略 www.mofa.go.jp/mofaj/files/000005947.pdf

連絡先

グローバルエイジングセンター準備室

筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野内

住所 : 茨城県つくば市天王台 1-1-1 総合研究棟 D740

Tel/Fax : 029-853-8849

E-mail : info@globalaging-tsukuba.org

Web site : <http://www.globalaging-tsukuba.org/>

Activities report of Center for Global Aging Tsukuba — International and multidisciplinary approach toward global aging —

Yumiko MIYASHITA¹⁾, Nanako TAMIYA¹⁾, Miyoko MOTOZAWA²⁾,
Toshie MANABE¹⁾, Shiho KASHIWAGI^{1,2)}, Abu Girma MOGES²⁾,
Ichiro OKUBO¹⁾, Yoko TANAKA²⁾, Hitomi MATSUDA¹⁾

¹⁾ Faculty of Medicine, University of Tsukuba

²⁾ Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

Currently, rapid growth of aging population has become a vital concern globally, not only in the developed countries but also in the developing countries. Prompt action is required to support older adults to have physically, mentally and socially healthy life. Especially, developing countries, whose economic and social infrastructure is immature, preparedness for the aging society is urgently required. Under these circumstances, the experiences of Japan, as the frontrunner of the super aged society, take important world-wide roles. On the other hand, the aging issues require the wide range of discussions such as on long-term care, medical treatment, social security, role of family, religion, and view of life and death. To consider and respect these social and cultural backgrounds, multidisciplinary approach is crucial for enhancing the well-being of older adults.

Thus, as the start-up of an international and interdisciplinary research and education, “Center for Global Aging Tsukuba” has just been born to disseminate Japan's experience to the world. Our aim is to be the liaison among researchers in the various fields and promote their exchange of information and collaborative research. We herein report our activities in the first year such as “The 1st International Conference on Global Aging Tsukuba”.

Keywords: Aging population, global aging, global health